

東亜同文書院の中国語教材

——『華語萃編』以前について——

石田卓生

はじめに

東亜同文書院は、一九〇一年（明治三四）五月、中国問題に取り組む団体、東亜同文会によって上海に設立され、日本の敗戦とともに消滅した高等教育機関である。当初は私塾的なものであったが、一九二一年（大正一〇）に専門学校、一九三九年（昭和一四）には大学に昇格するなど、中国国内に校舎を置きつつも日本の学校として五千人近くの卒業生を輩出した。

中国に関わる経済、政治分野の実務者の養成を目的としていたことから、この学校では中国語教育が重視されており、正課のほかにも中国語教育研究雑誌『華語月刊』（一九

二八年七月〜一九四三年一月）が刊行されたり、未完成に終わったものの中国語担当教員たちによって中国語辞典の編纂作業が行われたりしていた。なお、この辞典編纂は愛知大学『中日大辞典^①』の淵源となっている。

そうした活動の中で特筆すべきは、学年ごとに初集から四集まで用意された北京語の教科書『華語萃編』シリーズによって体系的な中国語教育が行われていたことである。この教科書は、東亜同文書院出身教員真島次郎^②、清水董三^③、鈴木沢郎^④、久重福三郎^⑤、熊野正平^⑥、坂本一郎^⑦などを中心に中国人教員もまじえて編まれ、必要に応じて改訂、増補をうけながら授業で使用され続けた。

その特徴について、今泉潤太郎氏は次のように述べている。

『華語萃編』が極めて高度な水準の教科書であるばかりか、これを教授するものに対して「此に載する能はざりし者少なからず、教授者其意を含みて補講せられんことを」期待されているのである。駿馬は騎手をえらぶという。同文書院以外で『華語萃編』を自在に使用する教授者も少なかったこともまた、その故に加えるべきかも知れぬ。

実際、『華語萃編』が東亜同文書院以外で用いられた例は少ない。管見によれば、『満州国』文教部の満州語講習所と、旧東亜同文書院関係者が設立に関係した戦後の愛知大学の二例だけである。

『華語萃編』が学外でほとんど使用されなかったことは、これが東亜同文書院用教科書として編まれたものであるというだけでなく、この学校の中国語教育活動の在り方にも原因があると考える。中国語を担当する日本人教員は母校出身者が占められており、その一人鈴木沢郎が中国語教員について「やつぱり同文書院出じやなきやだめだ、というふうに考えていた」と語っているように、排他的とも孤高的ともいえる環境の中で中国語が教えられていたのである。

このような東亜同文書院の中国語教育は、日本の中国語教育史の中で一定の評価をうけてきた。この分野の第一人者である六角恒廣氏は「日本における中国語教育の中心的

な柱となった善隣書院、東京外国語学校、東亜同文書院」と述べている。また、近年では独自の教材『華語萃編』や『華語月刊』に焦点を絞った研究によって、その教育活動の詳細な内容が明らかにされつつある。

そうした従来の研究には、中国語の授業数や担当教員の構成など教育課程の記録から考察するものや、『華語萃編』完成以降の時期に焦点を絞ったものが多い。しかし、授業数の多少といった制度面だけで実際の状況を理解することには限界があるし、大正以降に使われた『華語萃編』をみるだけでは、それ以前の状況を十分に把握できないという問題がある。

こうした点について、本論では『華語萃編』刊行以前の教材を用いて東亜同文書院初期の中国語教育を考察する。

一 御幡雅文『華語跬歩』

『華語萃編』は、一九一五年（大正四）九月より東亜同文書院で使われはじめた¹⁵。では、それ以前はどのような教材が使われていたのだろうか。

開校した一九〇一年（明治三四）から一九〇二年（明治三五）九月まで中国語を教えたのは御幡雅文である。彼が用いた教材について、教え子の江口良吉¹⁶、茂木一郎¹⁷、大野弘は¹⁸、「御幡雅文は、毎日曜自著の『華語跬歩』を熱心

に教えた⁽²⁰⁾と述べている。

『華語跬歩』は北京語の教科書で、もともと「瓊浦揮肅」⁽²¹⁾名義で未定稿（一八八六年（明治一九）夏）として刊行されたものである⁽²²⁾。これを基にしたという『華語理歩上編』

（日清貿易商会蔵版、一八九〇年八月（明治二三））と『華語理歩下編』（同版、一八九一年（明治二四））が日清貿易研究所で使われたと推定され、東亜同文書院の開学とほぼ同時に『華語跬歩全』（東亜同文会蔵版）が刊行された。なお、未定稿本、日清貿易商会蔵版の上下編は筆者未見。

東亜同文書院で用いられた『華語跬歩』は、刊行時期から考えて東亜同文会蔵版と推断するが、この版には一九〇一年に東亜同文会が刊行したもの（以下、東亜同文会本）、一九〇三（明治三六）〜一九〇八（明治四一）年の間に文求堂が発行したもの（以下、文求堂本）、一九〇八年から刊行された増補本（以下、増補本）の三種がある（次頁表1参照）。

(一) 東亜同文会本

一九〇一年に刊行された東亜同文会本は、折り込み表一枚を付けた七六丁の和装本である。中表紙には「明治辛丑歲五月」（明治三四年五月）、「東亜同文会蔵版」とある。

その奥付を引く。

明治三十四年五月一日印刷

明治三十四年七月十日発行（非売品）

発行所 東京市赤坂区溜池町二番地 東亜同文会

編輯兼発行者 東京市芝区露月町十五番地 柏原文太

郎

印刷者 東京市麹町区紀尾井町三番地 高橋信定

印刷所 東京市麹町区紀尾井町三番地 麹町活版所

ここには著者である御幡雅文の名前はない。替わって「編輯兼発行者」として柏原文太郎⁽²³⁾の名が記されている。

柏原は東亜同文会の幹部であり、同会が設立した中国人留学生を対象とする東京同文書院（後の目白中学校、現中央大学付属高等学校）の運営を担っているが、中国語教育に關する業績がある人物ではない。

該書の構成は、目次「華語跬歩目錄上編」、発音教材「北音平仄譜」が巻頭におかれ、続く部分は三つの部分ごとに丁数が振られている。

第一部分は、中国人の姓を集めた「百家姓」（第一〜二丁）である。

第二部分は、単語集「天文類」「地輿類」「房屋類」「時令類」「水火類」「呼称類」「舖店類」「身体類」「飲食類」「傢伙類付衣冠類」「禽獸類付昆虫類」「葯材類」「疾病類」「貨物類」「顔色類」、常用例文集「散語類」「統散語類」の全一七類（第一〜四五丁）である。

第三部分は、日常会話例文集「家常問答」全三六章（第

表1 『華語跬步』諸本一覽

出版時期	著者・編者	題名	出版	版	版数・刷数	備考
1886年夏 (明治19)	瓊浦揮康	華語理步		未定稿		未見。
1890年8月 (明治23)	御幡雅文	華語理步 上編		日清貿易商會 藏版		未見。
1891年 (明治24)	御幡雅文	華語理步 下編		日清貿易商會 藏版		未見。
1901年7月10日 (明治34)	柏原 文太郎 編輯	華語跬步 全		東亜同文會 藏版		2、45、28丁、 折込表1枚、23cm、 和装本、非売
1903年10月1日 (明治36)	御幡雅文	華語跬步 全	文求堂	東亜同文會 藏版	初版 〔第1版第1刷〕	2、11、6、32、35、 21、9丁、 和装本、市販
1905年8月5日 (明治38)	御幡雅文	華語跬步 全	文求堂	東亜同文會 藏版	再版 〔第1版第2刷〕	未見。
1906年6月1日 (明治39)	御幡雅文	華語跬步 全	文求堂	東亜同文會 藏版	第3版 〔第1版第3刷〕	未見。
1907年2月15日 (明治40)	御幡雅文	華語跬步 全	文求堂	東亜同文會 藏版	第4版 〔第1版第4刷〕	未見。
1907年5月20日 (明治40)	御幡雅文	華語跬步 全	文求堂	東亜同文會 藏版	第5版 〔第1版第5刷〕	未見。
1908年1月1日 (明治41)	御幡雅文	華語跬步 全	文求堂	東亜同文會 藏版	第6版 〔第1版第6刷〕	未見。
1908年9月5日 (明治41)	御幡雅文	増補 華語跬步	文求堂	東亜同文會 藏版	第7版 〔第2版第1刷〕	序6、自序2、凡例 4、目次2、本文352 ページ、折込表1枚、 23cm、洋装本、市販
1910年1月10日 (明治43)	御幡雅文	増補 華語跬步	文求堂	東亜同文會 藏版	第8版 〔第2版第2刷〕	未見。
1911年4月25日 (明治44)	御幡雅文	増補 華語跬步	文求堂	東亜同文會 藏版	第9版 〔第2版第3刷〕	未見。
1913年5月20日 (大正2)	御幡雅文	増補 華語跬步	文求堂	東亜同文會 藏版	第10版 〔第2版第4刷〕	未見。
1915年4月25日 (大正4)	御幡雅文	増補 華語跬步	文求堂	東亜同文會 藏版	第11版 〔第2版第5刷〕	序6、自序2、凡例 4、目次2、本文352 ページ、折込表1枚、 23cm、洋装本、市販
1917年5月1日 (大正6)	御幡雅文	増補 華語跬步	文求堂	東亜同文會 藏版	第12版 〔第2版第6刷〕	序6、自序2、凡例 4、目次2、本文352 ページ、折込表1枚、 23cm、洋装本、市販

六一二八丁)である。

また、文字の四隅に点を打つことで四声をあらわし、有気音は黒点に、「家常問答」では重念(重読)する文字の向かつて右側に「一」を付けている。

(二) 文求堂本

一九〇三年に刊行された文求堂本は、東亜同文会本と同型の和装本であるが、全一三二丁と大幅に増丁されている。表紙に「華語跬歩全」、中表紙には「御幡雅文編」「東亜同文会蔵版」とある。

その奥付を引く。

明治三十六年九月廿五日印刷 明治三十六年十月一日

発行

著作者 御幡雅文

発行者 田中慶太郎 東京市本郷区本郷三丁目十番地

印刷者 野村宗十郎 東京市京橋区築地三丁目十五番地

地

印刷所 株式会社東京築地活版製造所 東京市京橋区

築地二丁目十七番地

発行所 東京市本郷区本郷三丁目十番地 文求堂書店

電話番号下谷 八百二十番

東亜同文会本では記されていないが御幡雅文の名が

「著作者」として記され、「発行者」は文求堂の田中慶太郎

となっている。

また、東亜同文会本は非売品であったが、この文求堂本は市販されていた。巻末「売捌所」欄には、取扱店が記されている。

東京市日本橋区通三丁目

丸善株式会社

東京市神田区表神保町

東京堂書店

東京市神田区表神保町

中西屋書店

京都市下京区寺町通四条北

文求堂書店

京都市上京区寺町通二条南

松田書店

大阪市南区心斎橋筋一丁目

松村書店

神戸市元町五丁目

吉岡書店

清国上海英租界棋盤街

江左書林

該書の構成をみると、巻頭に東亜同文会本にはなかった序文が収録されている。それは、長岡護美(東亜同文会副会長)、小田切万寿之助(上海総領事)、陶森甲、長白桂林²⁶によるものである。

次に目次「華語跬歩目録」、発音教材「官話音譜」が三丁、「官話平仄編」が四丁あり、以降は七つの部分ごとに丁数が振られている。

第一部分は、「百家姓」(第一一二丁)である。

第二部分は、単語集「天文類」「地輿類」「房屋類」「時令類」「水火類」「呼称類」「舖店類」「身体類」「飲食類」「傢伙類付衣冠類」「禽獸類付昆虫類」「药材類」「疾病類」

「貨物類」「顔色類」、以上一五類(第六一―一丁)である。

第三―四部分は、常用例文集「散語類」(第一―六丁)と「続散語類」(第一―三三丁)である。

第五部分は、日常会話集「家常問答」(第一―三五丁)である。

第六部分は、面会時を想定した会話例文集「接見問答」(第一―二二丁)である。

第七部分は、諺集「常言類」(第一―九丁)である。

このうち「接見問答」と「常言類」は、東亜同文会本にはない増補された部分である。また、東亜同文会本では全三六章であった「家常問答」が、第三六章を書き換えた上で大幅に加筆され全五〇章となっている。

四声、有気音の表記、「家常問答」で重念に「一」を付けることは東亜同文会本と同様であるが、追加された「接見問答」「常言類」は、句ごとに一字分の空白を入れるだけの白文である。

後述する増補本(第一二版)奥付によれば、この文求堂本には一九〇三年の初版のほかに、一九〇五年再版、一九〇六年第三版、一九〇七年二月第四版、同年五月第五版、

一九〇八年第六版が刊行されている。筆者が実見したのは初版本だけであるが、各版の刊行時期の間隔があまりに短いことから、この版次は内容変更を伴うものではなく、増刷回数を示しているものと思われる。

(三) 増補本

一九〇八年(明治四一)九月に刊行された増補本は、和装本であった東亜同文会本や文求堂本と異なり洋装本である。次にその奥付を引く。

明治三十六年九月廿五日印刷

明治三十六年十月一日発行

明治三十八年八月五日再版発行

明治三十九年六月一日三版発行

明治四十年二月十五日四版発行

明治四十年五月二十日五版発行

明治四十一年一月一日六版発行

明治四十一年九月一日増補七版印刷

明治四十一年九月五日増補七版発行

実価金壹円八拾銭

著作者 御幡雅文

発行者 田中慶太郎 東京市本郷区湯島四丁目八番地

印刷者 野村崇十郎 東京市京橋区築地三丁目十一番

地

印刷所 株式会社東京築地活版製造所 東京市京橋区

築地二丁目十七番地

発行所 東京市本郷区湯島四丁目八番地 文求堂書局

電話下谷八百二十番 振替貯金二百十八番

該書も文求堂本と同じく市販されていた。卷末には次に引く取扱店が記されているが、文求堂本よりも販路は増えており、日露戦争後に日本の勢力圏となった大連や中国東北地方でも販売されている。

東京市日本橋区三丁目 丸善株式会社

東京市神田区表神保町 東京堂書店

東京市神田区裏神保町 武蔵屋書店

東京市神田区一ツ橋通街 文求堂支店

京都市上京区寺町通二条南 松田書店

大阪市南区心齋橋筋一丁目 松村書店

清国上海大東門内 校経山房

大連市大山通一丁目 大阪屋書店

大連市伊勢町 文英堂書店

満州安東県市場通六丁目 文栄堂書店

該書の構成は、巻頭に端方（南洋大臣兼両江總督）、長岡護美、小田切万寿之助の序文（六頁）、自序（二頁）、凡例（四頁）がおかれている。このうち、長岡と小田切の文章は文求堂本からの再録である。

次に目次「増補華語跬歩目録」（二頁）、発音教材「官話音譜便覧」（折り込み表一枚）と「訂正官話平仄編」（四頁）がある。以降は三五二頁あり、「百家姓名統」「部首、分野」ごとに単語と常用例文を集めた「数日短句散語類」「天文短句散語類」「地御輿短句散語類」「時令短句散語類」

類」「水火短句散語類」「飲食短句散語類」「衣冠短句散語類」「傢伙短句散語類」「昆虫短句散語類」「草木類」「禽獸類」「身体類」「倫常類」「呼称短句散語類」「疾病短句散語類」「葯材短句散語類」「房室短句散語類」「舖店短句散語類」「顔色短句散語類」、日常会話集「家常問答」、常用例文集「統散語類」、面会時の会話集「接見問答」、諺集「常言類」、名乗り方に関する例文集「通姓捷訣」「部首俗称」で構成されている。

筆者が実見した増補本第七版、第一一版、第一二版の内容はすべて同じであり、奥付記載の版次は内容変更を伴うものではなく増刷の回数を示していると考えられる。ちなみに、文求堂本から増補本まで版次が通し番号となっており、例えば、第一二版とは増補本の第六刷を指している。この増補本がいつまで刊行されていたのか明らかではないが、確認できた最も新しいものは一九一七年（大正六）第一二版である。

四 東亜同文会と『華語跬歩』

御幡雅文が東亜同文書院で用いた『華語跬歩』は、その在職期間（一九〇一—一九〇二）から考えて一九〇一年刊行の東亜同文会本であったと推定する。

前述したように、東亜同文会本は著者である御幡の名がなく、東亜同文会から柏原文太郎「編輯」による非売品と

して出されていた。東亜同文会の内部刊行物といえるような形での出版は、該書の刊行が御幡自身による活動ではなく、東亜同文会主導によるものであったことを示しているだろう。

このことについて注目されるのが、東亜同文会本の目次が「華語跬歩目錄上編」と題されていることである。東亜同文会本は表紙に「華語跬歩全」と記された一巻本であり、目次の「上編」の語は意味をなさない。しかし、未見のため内容より判断することはできないが、東亜同文会本に先行する版の中には『華語瑣歩上編』とするものがあり、これを参考にしたとすれば「上編」の語がまぎれてしまふことも考えられる。

著者本人以外の人物によって「編輯」された東亜同文会本は、以前の版を改訂したり加筆したりしたのではなく、既存の内容を流用したものなのかもしれない。

一九〇二年の御幡の退職後、文求堂本、増補本の両『華語跬歩』が東亜同文書院で使われたという確証はない。しかし、やはり『華語跬歩』が使用され続けたと推測する。なぜならば、この教科書と東亜同文書院の運営母体東亜同文会との間には繋がりが認められるからである。

文求堂本と増補本は共に東亜同文会蔵版として刊行されたものであるし、愛知大学所蔵の東亜同文会本と文求堂本にみえる「東亜同文会京都支部清語講習所²⁷⁾」という押印

は、これらが関連機関で使用されていたことをうかがわせる。このようなことから東亜同文会蔵版『華語跬歩』は東亜同文会のいわば公式テキストだったのであり、その意味において同会運営の東亜同文書院で用いられた可能性が最も高い教科書だと考えられるのである。

また、文求堂本、増補本を合わせて二回も増刷されたことは、その販売を支える確実な顧客の存在を想像させる。もちろん、毎年百名前後の新入生の教材を揃えなければならぬ東亜同文書院はそうした顧客になりうるだろう。さらに、この学校にとって校舎のある上海で販売されていた該書は最も入手しやすい身近な教材であったに違いない。

以上のことから、東亜同文書院では『華語萃編』初集が刊行されるまでの期間、一九〇一年から一九〇二年は東亜同文会本、一九〇三年から一九〇八年までは文求堂本、以降一九一五年までは増補本が使われたと推定する。

二 『華語萃編』初集と

それ以前の教材の關係

(一) 『華語跬歩』と『華語萃編』初集

『華語跬歩』の東亜同文会本、文求堂本、増補本を比較

すると発音に関する部分に大きな違いがみられる。

東亜同文会本は、「北音平仄譜」によって四〇九音節を示す。五十音順に並べた各音節について上平、下平、上声、去声ごとに漢字をあてているが、発音自体についての記述はない。

文求堂本は、「官話音譜」と「官話平仄編」によって四〇八音節を示す。「官話音譜」は、五十音順に並べた音節ごとに漢字をあて、さらにカタカナとウエード式ローマ字綴りの両方で発音を表している。「官話平仄編」には発音表記はなく、五十音順配列の各音節について上平、下平、上声、去声ごとに漢字をあてている。

増補本は、「官話音譜便覧」と「訂正官話平仄編」によって四一〇音節を示す。音節表「官話音譜便覧」は各音節に漢字を一字あてているが、「我五十音ノ順序ニ抛リ『アイウエオ』『ヤユエヨ』『ワヅウヱヲ』ノ十五音ノ母音ノ基礎ト為シ新規ニ三十五種ノ母音ヲ編製シ五十二種(例外音ヲ除ク)ノ子音ヲ以テ縦横ニ反切ヲ試ミ」と注記されているように、カタカナだけで中国語音を表している。「訂正官話平仄編」には発音表記はなく、「アイウエオヤユエヨワヱヲ」順に並べた音節について上平、下平、上声、去声ごとに漢字をあてている。

もちろん、こうした発音部分以外にも各本間には相違点がある。しかし、それは単語や例文の加筆といったもので

あり、発音部分にみられる音節数や表記方法にまで手入れるといった根本的な変更ではない。このことは、『華語跬歩』を改訂、増補する際、著者御幡雅文が発音部分にとりわけ大きな注意を払っていたことを示しているだろう。

『華語跬歩』の後に東亜同文書院の教科書となったのが『華語萃編』初集である。

『華語萃編』初集の著者代表真島次郎は、『華語跬歩』で中国語を学んだ東亜同文書院卒業生であり、『華語萃編』初集刊行に際してその影響をうけたことが推測されるが、本文では『華語跬歩』で御幡がとりわけ力を入れていたと思われる発音部分について両者を比較し、その相似点、相違点を見ていきたい。なお、『華語跬歩』から『華語萃編』への変化をみるため、本論で扱う『華語萃編』は最初に刊行された初集初版本とする。

『華語萃編』初集は、凡例に「本書初集は、東亜同文書院第一学年用北京官話教科書として編纂せるものなり」とあるように新入生を対象としたもので、初学者のための発音教材「華語音譜」「華語声音編」が収録されている。「華語音譜」は、「本譜は邦人の了解に便なるべきを思ひて、母音を「アイウエオ」の順に依り横に列し、子音を「アカサタナ」の序に従ひ縦に排せり」という音節表、「華語声音編」は各音節について声調ごとに漢字をあてた字音集である。これらによって四〇六音を示している。

発音表記を比較すると、『華語跬歩』は東亜同文会本、文求堂本、増補本のすべてが声調を上平、下平、上声、去声の語で表しているが、『華語萃編』初集では第一声、第二声、第三声、第四声となっている。また、『華語跬歩』は文求堂本でウェード式ローマ字綴りとカタカナを併記し、増補本ではカタカナのみとするなどカタカナ表記を中心としていた。これに対して『華語萃編』初集はローマ字表記だけである。ウェード式に倣いつつも、『h』を『h』、『i』を『yi』、『kuei』を『kuei』、『ku』を『ku』、『o』を『uo』、『ou』を『eu』、『su』を『su』、『tzu』を『tsu』、『ts'u』を『ts'u』、『wo』を『wo』と綴り方の一部を変更しており、本来のウェード式は『cheu (chou)』のように括弧にくくられている。

(一) 『北京官話声音譜』と『華語萃編』初集について

『華語跬歩』から『華語萃編』初集へという東亜同文書院中国語教材の変化をみるに際して、これまで取り上げられてこなかったもう一つの教材に注目したい。

それは一九〇五年（明治三八）に刊行された高橋正二編『北京官話声音譜』である。編者の高橋は日清貿易研究所での御幡雅文の教え子で、御幡退職後の一九〇三年（明治三六）から一九〇七年（明治四〇）にかけて東亜同文書院の教員を務めた。

この『北京官話声音譜』は、会話文を収録するような汎

用的な中国語教科書ではない。『華語跬歩』でいえば「北音平仄譜」「官話平仄編」「訂正官話平仄編」、『華語萃編』初集でいえば「華語声音譜」に相当する発音教材である。ローマ字だけで表した四〇二音節を五十音順に並べ（一部常用音を巻頭に置く）、各音節について声調ごとに漢字をあてる。

その凡例を引く。

凡例

- 一 本譜ハ東亜同文書院教科用トシテ編纂セルモノトス
- 一 本譜ハ必要ナル主音ヲ其首部ニ列シテ発音研究上ノ便ニ供ス
- 一 四声及発音ハ腔調ト相俟ツテ支那語研究者ノ三要件タルガ故ニ初学者須ク留意スベシ
- 一 従来行ハレタル語学書中羅馬綴リヲ以テ発音ヲ表示スルモノ多クハトーマス、ウェード氏ノ法ニ倣フト雖モ半開口音トモ称スベキニ音ニ属スベキモノニシテ或ハ〇字ヲ用ヒ合口音ニテ初ムベキウ音ニシテ又同シク〇字ヲ用ユル所アリ初学者ヲシテ其區別ヲ知ラシメ難キノ恐レアルヲ以テ本譜ハ之レヲ一定シテ其混同ヲ除去シタリ其他ノ綴字法ニ至リテハ概ネ慣例ニ随ヒ強ヒテ之レヲ改メズ
- 一 四声ハ上平、下平、上声、去声ニ分類スルモノ多

シト雖モ北京語ノ四声ハ詩韻ノ平仄ニ適合セザルモノ少カラズシテ其名称妥当ナラズ故ニ本譜ハ之レヲ第一声、第二声、第三声、第四声ト改称スル□トセリ

一 発音法ハ初学者ノ苦シム所ニシテ茲ニ説明スルモ容易ニ首肯シ難カルベキヲ以テ之レヲ口授ニ譲ル

明治乙巳仲秋

編者識

第一項で述べられているように、該書は東亜同文書院での中国語教育のために編まれたものである。発音教材であるにもかかわらず発音方法自体に関する解説はないが、第六項で発音については「口授ニ譲ル」とあることから、授業での使用を前提にしたものであることがわかる。

注目すべきは、同じ東亜同文書院のために著された『華語萃編』初集との関係である。両者が示す中国語の発音はよく似ているのである。一見してわかるところでは、声調を第一声、第二声、第三声、第四声とする表記がまったく同じである（『華語跬歩』では上平、下平、上声、去声としていた）。

東亜同文書院で使われた中国語教材のうち、ローマ字によって発音を表す文求堂本『華語跬歩』、『北京官話声音譜』、『華語萃編』初集の三者間で一致しない音をあげたものが次頁の表2である。これによれば、『華語跬歩』に対して『北京官話声音譜』と『華語萃編』初集がきわめて近いものであることがわかる。

まず、発音表記についてみると、『北京官話声音譜』のローマ字の綴り方は、前述した『華語萃編』初集のウェード式に手を加えたものも多くが共通している。また、使用頻度が低いとして学習対象から外されている音もほとんど一致する。両者の註記をみてみよう。

『北京官話声音譜』

本表ノ外、約 (yuo)、略 (lio)、虐 (nio)、学 (hsio)、爵 (chio) 等ノ音アルモ談話上ニ用ユル場合稀ナルヲ以テ之ヲ除ク

『華語萃編』初集

本譜には普通使用せらるゝ北京官話の発音総べて四百零六種を収む。此外に yai 涯、chia 楷、yio (yo) 約、hsio (hsio) 学、chio (chio) 爵、ch'io (ch'io) 却、nio (nio) 虐、lio (lio) 略、等の音あれども用うるゝこと稀なるを以つて之を除けり。

『華語萃編』初集の方が外す音 ([yai] [chiai] [ch'io] [chio]) が多いが、実際には、『北京官話声音譜』も [chiai] と [ch'io (chio)] を採録しておらず、異なっているのは [yai] だけである。

次に『北京官話声音譜』と『華語萃編』初集の示す全音を比較すると、前者が四〇二音、後者は四〇六音である。前者だけのものが [fou] と [yai]、後者だけのものが [ci] [kai] [p'eu (pou)] [sei] [shai] [t'eu (t'ou)] である。

表2 文求堂本『華語跬歩』、『北京官話声音譜』、『華語萃編』初集間で一致しない音節表記一覧

	文求堂本『華語跬歩』 (1903年)	『北京官話声音譜』 (1905年)	『華語萃編』初集 (1916年)
1		chei ○○○這	chei ○○○這
2	cho	chuo	chuo (cho)
3	ch'ò	ch'uo	ch'uo (ch'ò)
4	chou	chêu	chêu (chou)
5	ch'ou	ch'êu	ch'êu (ch'ou)
6			ci 餛○餛○
7	fo	fuò	fuò (fo)
8	fou	fêu	fêu (fou)
9	'ho	hê	hê (ho)
10	'hou	hêu	hêu (hou)
11	hsien [hsüên] 喧懸選選	hsüan 喧懸選選	hsüan 宣懸選選
12	jo	juò	juò (jo)
13	jou	jêu	jêu (jou)
14		juà ○稜○○	juà ○稜○○
15	k'ei 刻○○○		k'ei 刻○○○
16	ko	kê	kê (ko)
17	k'ò	k'ê	k'ê (k'ò)
18	kou	kêu	kêu (kou)
19	k'ou	k'êu	k'êu (k'ou)
20	kuei	kui	kui (kuei)
21	k'uei	k'ui	k'ui (k'uei)
22	kuen	kun	kun
23	k'uen	k'un	k'un
24	le 咧咧咧咧	lich 咧咧咧咧	lich 咧咧咧咧
25	lo 擲驟裸駱	luò 擲驟裸駱	luò (lo) 囉驟擲駱
26	luò ○○○略		
27	lou	lêu	lêu (lou)
28	lun ○輪圖論	lun 掄輪稜論	lun 掄輪圖論
29	lün 掄倫圖論		
30	mo	muò	muò (mo)
31	mou	mêu	mêu (mou)
32	no	nuò	nuò (no)
33	nou	nêu	nêu (nou)
34	nun ○○○嫩		
35	nün ○○○虐		
36	ou	êu	êu (ou)
37	po	può	può (po)
38	p'ò	p'uo	p'uo (p'ò)
39	pou 不不補不		pêu (pou) 不○○○

	文求堂本『華語跬歩』 (1903年)	『北京官話声音譜』 (1905年)	『華語萃編』初集 (1916年)
40	p'ou	p'èu	p'èu (p'ou)
41			sei 搥○○○
42	shing 星行醒姓		
43	shou	shèu	shèu (shou)
44	so	suo	suo (so)
45	sou	sèu	sèu (sou)
46	ssu	ssu	sũ (ssũ)
47			shei ○誰○○
48	to	tuo	tuo (to)
49	t'ò	t'uo	t'uo (t'ò)
50	tou	tèu	tèu (tou)
51	t'ou	t'ou	t'èu (t'ou)
52	tso	tsuo	tsuo (tso)
53	ts'ò	tsuo [ts'uo]	ts'uo (ts'ò)
54	tzũ	tzu	tsũ (tzũ)
55	t'zũ	tz'u [t'zu]	t'sũ (t'zũ)
56	wo	wuo	wuo (wo)
57	yai ○涯○○	yai ○涯○隘	
58	yo 約○○樂		
59	yüen 冤原遠願	yüan 冤原遠願	yüan 冤原遠願

注：三者間でいずれかの音節が欠けている部分、また注意が必要と思われる部分には各書があげる該当音の漢字を声調順に付記した。また、あきらかな誤植は […] 内に訂正を示した。

『北京官話声音譜』にのみあげられている
[ʔou] と [yai] から検討していく。

[yai] は、前掲『華語萃編』初集「華語音譜」凡例に述べられているように使用頻度の低さから外されているものだが、表2にあるように先行する文求堂本『華語跬歩』には収録されていたものである。

[ʔou] は有気音であるが、これに対応すると思われる無気音 [ʔou] が『北京官話声音譜』にはない。同様の無気音と有気音の非対称性が [ʔeu] [kei] [p'èu] についてみられる。これら四音について『華語萃編』初集をみると、[ʔeu (ʔou)] と [ʔeu (ʔou)]、[kei] と [kei]、[p'eu (pou)] と [p'eu (pou)] のように整った形がとられている。

続いて『華語萃編』初集にのみあげられている [ei] [kei] [p'eu (pou)] [sei] [shei] [ʔeu (ʔou)] をみる。

[kei] [p'eu (pou)] [ʔeu (ʔou)] は、前述したように『北京官話声音譜』において無気音と有気音が非対称となっていた部分である。

[ei] について、『北京官話声音譜』では単独の韻母として立てられていないものの、[ei] 系の音節 [ʔhei] [ʔei] [hei] [kei] [lei] [mei] [nei] [pei]

['pei] ['ei] ['sei] ['wei]) 自体はある。

['shei] は、['shui] とともに「誰」字の発音としてあげられているが、同字について『北京官話声音譜』は ['shui] しかあげてない。現在でも、['shei] と ['shui] は「誰」の字音として併記されることがあるが、正音 ['shui] に対して ['shei] は俗音である。したがって、『北京官話声音譜』が標音として ['shui] だけを立てることは発音教材として妥当性を欠くものではない。

['sei] は、「搥」の字音としてあげられている。現在、「搥」の字音は ['sai] とされているが、『華語萃編』初集の著者たちは ['sɛ] とみなして新たな音節を立てたのであろう。

以上の相違点を、『華語萃編』初集が『北京官話声音譜』を参考にしつつ著されたと仮定して考えると、『北京官話声音譜』に対して後述するような改訂を施したものが『華語萃編』初集の発音部分であるといえる。それは、無気音と有気音の非対称部分を修正する、['ɛ] を単独の韻母とする、「誰」(shui) の異音 ['shei] を追加する、新たに ['sci] を設定する、使用頻度の低い発音を除外するというものである。

そもそも、『華語萃編』初集の著者代表真島次郎は、『北京官話声音譜』の編者高橋正二の教え子であると同時に中国語の教員として同僚だったのであり、『華語萃編』初集を著すに際して『北京官話声音譜』が参考にされた可能性

は高いだろう。

さらに、『北京官話声音譜』と『華語萃編』初集の発音部分は、発音表記、内容が相似するだけでなく、『華語跬歩』とは根本的に異なった性格をもっていた。それは教材としての目的の違いにあらわれている。

『華語跬歩』の著者御幡は日本の中国語教育について次のように述べている。

英仏ノ語学ヲ学フ如ク完全無欠ナル語学書在レハ、固ヨリソレニ由リ独学シテ自カラ其学法ニ注意ヲ催スコトアルモ独リ支那語学ニ至リテハ、更ニ日本人ニ適当ナル学書ナキト、独学ノ参考書ナキカ為メナリ^抄

『華語跬歩』が改訂、増補される過程で発音部分が大幅に変更され、最終的にローマ字よりも日本人が見慣れたカタカナを使った表記のみとなったのも、日本人にとって「適当ナル」「独学ノ参考書」が目指されたためであつたらう。これに対して、ローマ字だけで発音を示した『北京官話声音譜』と『華語萃編』初集は、東亜同文書院で用いることを目的として編まれた教材であり、学外での使用は想定されていなかったのである。

おわりに

東亜同文書院では、一九一五年以降、自前の中国語教科

書『華語萃編』による中国語教育が行われたが、それ以前には、御幡雅文が日清貿易研究所などで使用してきた教科書を基とする『華語跬歩』が使われていた。

東亜同文書院が使用したと思われる『華語跬歩』には東亜同文会本、文求堂本、増補本の三種があり、最初に使われた東亜同文会本『華語跬歩』は発音表記が一切されていなかったが、次の文求堂本ではウェード式ローマ字だけでなく、カタカナでも発音が示されて学習の参考とされた。

その後、東亜同文書院を離れた御幡は一般での使用を想定して日本人が見慣れたカタカナだけで発音を表す増補本を出すことになる。

御幡退職後の東亜同文書院では、教員の一人高橋正二によって発音教材『北京官話声音譜』が刊行された。同時期に東亜同文書院で使用されたと考えられる文求堂本『華語跬歩』にも発音部分があるにもかかわらず、高橋がわざわざ新たな教材を編んだのは、東亜同文書院での中国語教育活動を通してその必要性を感じたからであろう。この『北京官話声音譜』は、『華語跬歩』の発音部分と大きく異なる一方、カタカナ表記がなくウェード式を改良した同様のローマ字綴りによって中国音を表すなど『華語萃編』初集の発音部分ときわめて似たものであった。『華語萃編』初集の著者代表真島次郎が高橋の教え子でもあり同僚でもあったことをふまえれば、『北京官話声音譜』の内容は

『華語萃編』初集へと受け継がれていったと考えられる。

そうした使用教材の内容と変遷からは、東亜同文書院の中国語教育が、開校間もない時期から自校での教学経験に基づいて独自に発展していく様をみてとることができるのである。

注

〔1〕 東亜同文書院では一九三三年（昭和八）から中国語辞典編纂作業がすすめられていたが日本敗戦により学校自体が消滅したため頓挫した。この際、中国側に接取された辞典原稿が、一九五四年（昭和二九）に日本に返還され、これをもとに愛知大学中日大辞典編纂処編『中日大辞典』（愛知大学中日大辞典刊行会、一九六八年）が編纂刊行されている。

〔2〕 本論でいう「北京語」とは、北京巷間の言葉ではなく、中国北方を中心に通用した「北京官話」を指す。

〔3〕 真島次郎（？～一九二五）。佐賀出身。第二期生、政治科。卒業後、病死するまで東亜同文書院教授として学校の運営、後輩の教育にあたった。『華語萃編』初集著者代表。

〔4〕 清水董三（一八九三～一九七二）。栃木出身。第一期生。東亜同文書院教授を経て外務省に入り、戦後は中華民国公使を務めた。

〔5〕 鈴木沢郎（一八九八～一九八二）。栃木出身。第一期生、商科。東亜同文書院教授、東亜同文書院大学教授

を経て愛知大学教授。戦後、中国より返還された東亜同文書院辞書編纂資料をもとに、愛知大学中日大辞典編纂処編『中日大辞典』(中日大辞典刊行会、一九六八年)を刊行した。

(6) 久重福三郎(一八九六〜一九六八)。岡山出身。第一六期生。卒業後、鈴木商店勤務を経て東亜同文書院の教員となり、アメリカ留学へ派遣され、東亜同文書院教授、東亜同文書院大学教授。後、神戸市外国語大学教授、名古屋学院大学教授。

(7) 熊野正平(一八九八〜一九八二)。徳島出身。第一七期生、商務科。北京大学中国文哲学科修了。東亜同文書院教授、東亜同文書院大学教授を経て東京商科大学専門部に移り、一橋大学教授、二松学舎大学教授、東亜学院院長を歴任。経済学博士。『熊野中国語大辞典』三省堂、一九八四年。

(8) 坂本一郎(一九〇三〜一九九六)。大分出身。第二〇期生、商務科。卒業後、北京大学留学を経て東亜同文書院教授、関西大学教授、神戸市外国語大学教授を歴任。

(9) 『華語萃編』。各集は度々改訂がほどこされており、筆者が確認した各集各版は以下のものである。初集(一九一六年初版(一九一四年凡例)、一九二五年訂正版、一九四二年改訂版(全訂版、大同書院発行)、一九四三年改訂版(全訂版、東亜同文書院大学華語研究会発行)、二集(一九二五年初版、一九三〇年訂正版)、三集(一九二五年初版、一九三二年改訂版、一九三三年改訂版、一九三八年改訂版(一九三七年凡例)、四集(一九三三年初版))。

(10) 今泉潤太郎「東亜同文書院における中国語教学」『愛

知大学国際問題研究所紀要』第一〇三号、一九九五年、二四―二五頁。

(11) 安島元一「滿洲国就職案内」研文書院、一九三五年、二七七―二七八頁。

(12) 「鈴木沢郎氏に聞く」愛知大学五十年史編纂委員会編『大陸に生きて』風媒社、一九九八年、七〇頁。

(13) 六角恒廣『中国語教育史論考』不二出版、一九八九年、八四頁。

(14) 制度面からの研究には、六角恒廣「東亜同文書院の中国語教育」『早稲田商学』第三二八号、一九八六年)、同『中国語教育史の研究』(東方書店、一九八八年、三一―三三四頁)がある。『華語萃編』、『華語月刊』については、今泉、前掲論文、松田かの子「官話教科書『華語萃編』の成立に関する一考察」(『芸文研究』第八〇号、慶応義塾大学、二〇〇一年)、同『華語月刊』と東亜同文書院の中国語教育(同第八八号、二〇〇五年)がある。

(15) 『華語萃編』初集は一九一六年初版であるが、第一五期生鈴木沢郎は自身の一年時(一九一五年九月〜一九一六年七月)より『華語萃編』初集が用いられたと回想している(前掲「鈴木沢郎氏に聞く」二三頁)。

(16) 御幡雅文(一八五九〜一九二二)。長崎出身。東京外国語学校漢語学科、陸軍参謀本部派遣北京留学。熊本鎮台や上海の日清貿易研究所の中国語教員を務め、日清戦争の従軍通訳、台湾総督府翻訳官を経て三井物産上海支店に入り、その傍ら日曜に東亜同文書院で一週分の授業をした。

〔内藤熊喜回想〕（『東亜同文書院大学史』 滬友会、一九五五年、一六九頁）、六角恒廣「御幡雅文——上海の語学の達人」（『漢語師家伝』 東方書店、一九九九年、一六八一—六九頁）、鱒沢彰夫「御幡雅文伝考」（早稲田大学中国文学会『中国文学研究』 第二六期、二〇〇〇年）、同「御幡雅文伝考拾遺」（同第二七期、二〇〇一年）。

〔17〕 江口良吉。山形出身。第二期生、商務科。卒業後は武昌警務学堂副教習、長崎高等商業学校中国語教員、後に東亜同文会、外務省で情報収集活動に従事し、さらに日本女子商業学校や中央商業学校で東洋史教員を経て漢治萍公司大治詰顧問。著書に『発音及会話』（一九〇八年）、『正しく覚えらるる支那語入門』（太陽堂書店、一九二九年）、『思想の影に立ちて』（我と人生社、一九三〇年）、石山福治共著『初等支那語研究』（崇文堂出版部、一九三二年）がある。

〔18〕 茂木一郎（一八八四—一九六六）。群馬出身。第二期生、商務科。卒業後東亜同文書院教員となり、後に三菱商事に入って天津、漢口、横浜各支店長を務める。日本ソルデチット会社常務取締役を経て中支那振興調査部長、中華塩業公司顧問（山口啓三「追憶」『滬友』 第二二号、滬友会、一九六七年、四頁。前掲『東亜同文書院大学史』 一七二頁）。

〔19〕 大野弘。埼玉出身。第二期生、商務科。横浜正金銀行入行、上海、營口、遼陽、長春勤務を経て一九一四年漢治萍公司上海総公司顧問部員（前掲『東亜同文書院大学史』 一七二頁）。

〔20〕 江口良吉、茂木一郎、大野弘「第二期生回想記」前掲

『東亜同文書院大学史』 一七二頁。

〔21〕 「瓊浦」は長崎、「揮肅」は御幡の号。

〔22〕 『華語理歩』（未定稿）。六角恒廣氏によれば、巻頭にトーマス・ウエード「平仄編」に做った発音教材「北音平仄編」、次に『漢語理歩』の影響をうけたと思われる「天文類」「地輿類」「房屋類」や「貨物類」「顔色類」など分野ごとに類別された単語集が全一五類、続いて例文集「散語」と「問答」が全三六章、「附録」として中国人の姓を取めた「百家姓」と広部精「亜細亞言語集」に似た諺集「常言類」という内容であるという（六角、前掲「御幡雅文——上海の語学の達人」一五一頁）。

〔23〕 筆者未見。六角、前掲「御幡雅文——上海の語学の達人」一五四頁。鱒沢、前掲「御幡雅文伝考」三三、四二—四三頁。

〔24〕 国立国会図書館所蔵東亜同文会本の奥付は「明治三十四年七月十日発行」を「七月三十日」、「発行者」を「編輯者」、「編輯兼発行者」を「右代表者」、「東京市芝区露月町十五番地」を「牛込区水道町四十一番地」と修正された跡があり、各箇所に柏原の訂正印が押されている。

〔25〕 柏原文太郎（一八六九—一九三六）。衆議院議員。東亜同文会幹部として中国人留学生教育を行う東京同文書院の設立運営を担当、後に同会が中国に設立した中日学院、江漢中学堂にも関わった。

〔26〕 長白桂林、桂林は号。御幡雅文が北京留学にした際の中国語教師（文求堂本『華語理歩』。六角、前掲「漢語師家伝」一四三—一四六、一七〇頁）。また、一八八二年五月

から一八八四年七月まで東京外国語学校で中国語を教えた人物に関桂林の名がある（張美蘭「明治時代の中国語教育とその特徴」愛知大学現代中国学会編『中国21』Vol. 27、二〇〇七年、一四一頁）。

〔27〕一九〇二年（明治三五）五月の東亜同文会京都支部総会で幹事八田一精が「昨三十四年十二月評議員会を開催し其研究の方法に付審議を求めたる処当支部事業として清語講習所を設立することに議決し既に本年五月一日を以て之が開所式を挙行せり（中略）入学生は現在四十六名なり」〔東亜同文会報告〕第三二回、東亜文化研究所編『東亜同文会史 明治大正編』霞山会、一九八八年、三四七―三四八頁）と報告している。

〔28〕真島次郎著者代表『華語萃編』初集、上海・東亜同文書院、一九一六年初版、一九一九年第三版（六角恒廣『中国語教本類集成』第二集第二巻、不二出版、一九九二年、二〇九頁）。

〔29〕同右、二一〇頁。

〔30〕発音表記については、「発音の表示法は羅馬字綴を用ひ、大体に於てトーマス、ウェード氏の語言自選集チャイルス氏の華英大字典の方式に倣へりと雖も、発音の混同を避け画一を期して、改正を加へたるものあり。但英文にありては概ね彼に従ふを以つて、括弧を施し其下に並記し置けり」（同右、二〇九頁）と説明している。

〔31〕高橋正二編『北京官話声音譜』上海・東亜同文書院、一九〇五年、序。

〔32〕高橋正二（一八七〇―一九三六）。久留米出身。一八八六年福岡県立久留米中学校卒業、東京英学校を経て日清貿易研究所に学ぶ。日清戦争には通訳官として従軍。三井物産合名会社香港支店に勤務した後、東亜同文書院、久留米商業学校、九州帝国大学、九州医学専門学校で教壇に立った（中村彰夫「在清見聞録」第一経済大学経済研究会編『第一経大論集』第九巻第一・二合併号、一九七九年、五一―七七頁）。

〔33〕高橋正二の東亜同文書院在職時期については、松岡恭一、山口昇編纂『日清貿易研究所東亜同文書院沿革史』（上海・東亜同文書院学友会、一九〇八年）に、「一九〇七年一月二月三〇日高橋教授辞任」（同、九二頁）、教職者名簿に「高橋正二 明治三六年五月一日―明治四〇年一月二三日」（同、九七頁）とある。着任を一九〇二年とする説もある（中村、前掲論文、五一頁）。

〔34〕高橋、前掲書、一頁。

〔35〕同右、一五頁。

〔36〕『華語萃編』初集（六角、前掲『中国語教本類集成』第二集第二巻、二一〇頁）。

〔37〕「一九〇〇年」三月、小室三吉上海支店長からの御幡の意見をとりにいたれた意見書。罇沢、前掲「御幡雅文伝考」三九頁（山下直登「三井物産会社支那修業生制度の歴史的要義」『西南地域史研究』第四輯、一九八〇年、三三〇―三三一頁、三井文庫所蔵（物産一四四）『明治三十三年上半季会議録』所収の孫引き）。句読点は罇沢による。